

日本の方池と韓国の方池

飛鳥時代の園池で特徴的な遺構に、平面方形の一群の池がある（以下、「方池」と呼ぶ）。その代表は島庄遺跡の方池であるが、この他、池の全体形がわかっているものに、石神遺跡の2基の方池と宮城県仙台市郡山遺跡の方池がある。また、方池の一部と考えられる遺構は坂田寺跡、平田キタガワ遺跡、雷丘東方遺跡の3箇所で見ついている。郡山遺跡を除くといずれも飛鳥地域にあるというのも特徴である。なお、飛鳥池遺跡でも石積護岸の方池が発掘されているが、この方池は工房の排水処理を目的としたものと考えられており、ここでは検討対象からはずすこととした。

一方、ほぼ同時期と考えられる方池が韓国の百濟地域でも発見されていて、わが国の方池との関連が問題視されている。韓国の方池は扶余の定林寺跡、王宮跡推定地、益山の弥勒寺跡の3箇所である。

本稿では彼我の方池を比較検討し、両者の系譜関係を考えてい。

日本の方池

はじめに日本の方池の概要を見ておく。

島庄遺跡（図10） 飛鳥川右岸の緩傾斜地にあり、方池のなかでも内法一辺が42mと、とびぬけて大きい。池の周囲は上面に敷石のある、幅約10mの堤が巡る。堤の高さは保存状態の良い東南隅で、内側2m、外側0.8mである。堤の石積は内外面ともに河原石を野面積みしたもので、内側は径50cm前後の石をほぼ垂直に6、7段に積み上げ、外側は径30～40cmの石を約70度の角度で3、4段に積む。堤は、内外面とも隅が小さな円弧をえがく。池底には径20～30cmの河原石を池中央にむかって緩やかに下がる角度で貼ってある。池の給水口は不明だが、南方で見ついている石組水路を経由したと推定されている。排水施設は北辺中央部の護岸下に埋められた木樋暗渠である。木樋は断面U字形にくり抜かれており、径約60cm、一本の長さ約8mの巨材で、上に厚さ約15cmの盖板がのる。蓋の端部には径20cmの円孔が穿たれている。円孔の左右約1.5mの位置に掘立柱が立つ。遺構としては残存していなかったが、おそらくこの円孔に縦樋を差し込み、縦樋の途中に設けた複数の排水口の栓を抜き差



図10 島庄遺跡方池南隅（東から）
（『発掘された東アジア古代苑池』1988、奈良県立橿原考古学研究所、より再掲）

しすることによって池の水位を調整したのであろう。両側の柱は縦樋の上部を固定する横木をとめるためのものと理解できる。池の築造年代は池底から出土した土器によって6世紀末から7世紀初頭と考えられている。蘇我馬子の邸宅、天武天皇の別宮嶋宮、草壁皇子の嶋宮などとの関連が推定されている池である。

石神遺跡 同じく、飛鳥川右岸にあり、水落遺跡と飛鳥寺の北に接している。ここからは明治35年（1902）、「須彌山石」、「石人像」と呼ばれる2体の石造物が出土し、『日本書紀』に登場する「須彌山」との関連が注目されている。1980年から当研究所が計画的な発掘調査を続け、7世紀中頃から奈良時代におよぶ大規模な宮殿跡であることが明らかになってきた。ここでは2基の方池が発見されている。石神遺跡方池A、石神遺跡方池Bとして、その概要を記す。

石神遺跡方池A（図11）は、4棟の長大な建物で囲まれた東西16.8m、南北42mの中庭の西南部につくられた石組池である。一辺約6mの正方形で、深さは0.8mである。護岸は河原石を2、3段に積み重ねるが、四隅に



図11 石神遺跡方池A（西から） 四隅に立石がある



図12 石神遺跡方池B（東から） 周囲にも石が敷かれている

は立石を据えている。護岸の裏込めは粘土と砂質土を版築のように交互につき固め、池底は地山の上に粘土を敷き、その上に小石を敷きつめている。池の周囲に石敷はなく、中庭の表面は土のままであったようだ。給排水施設は確認できなかったが、池の築成法などから考えると、水を蓄えたことは疑いなく、懸樋などを用いて宴会や儀式的時に一時的に給水した可能性がある。池の年代は7世紀中頃の斉明朝と考えられている。

石神遺跡方池B（図12）は、石神遺跡の南を画する東西堀の南にあり、水落遺跡との関連も考えられるが、水落遺跡が斉明朝であるのに対して、方池Bは7世紀後半代、天武朝の遺構であり、年代が合わない。池の規模は東西3m、南北3.2m、深さは約0.6mである。護岸は幅40～90cmの河原石を立て並べ、底には拳大の礫を敷く。護岸の裏込めや池底には黄色粘土を用いている。池の周囲には礫敷がある。給排水施設は、方池A同様不明である。

郡山遺跡（図13） 仙台市の南、広瀬川右岸の自然堤防上にあり、ほぼ平らな地形である。方池は陸奥国庁の政



図13 郡山遺跡方池（北から）
石組の給排水路がとどく



図14 坂田寺跡

庁正殿の北東20mという役所の中枢部に位置する。池の大きさは東西3.7m、南北3.5m、深さ0.8mであり、護岸は径20cm前後の河原石を小口積に4、5段に積み上げている。底には拳大のやや扁平な礫を敷き詰めていたと推定される。北辺中央に給水用の石組溝がとりつき、西辺中央にはオーバーフローを受ける排水用石組溝がある。池の南には正殿の北側一帯に敷かれていた石敷がある。年代は7世紀末から8世紀初頭と考えられる。

坂田寺跡（図14） 北方の飛鳥川に向かって下がる傾斜地にあり、池は寺域の北に位置する。池の全容は不明だが、東、北岸を検出した。規模は東西6m以上、南北10m以上あり、深さは約1mである。東岸は径20cm前後の河原石を6段に積むが、北岸は石積みを確認できていない。池底、池の周囲には礫敷はない。坂田寺は西を正面とし、東西に中軸線がはしると考えられるが、この池は中軸線から大きくはずれ、方位も45度近く振れている。池の年代は7世紀前半である。

平田キタガワ遺跡（図15） 飛鳥川の谷の一本西を流れ



図15 平田キタガワ遺跡の護岸と上下の石敷（南から）
（『発掘された東アジア古代苑池』1988、奈良県立橿原考古学研究所、より再掲）

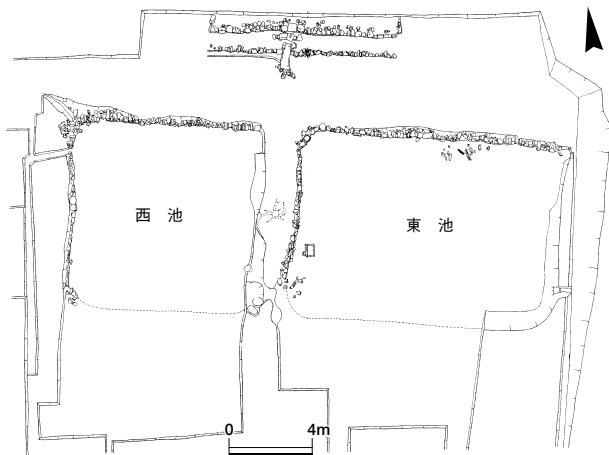


図16 定林寺跡 東・西池遺構平面図（『扶餘定林寺址蓮池遺蹟発掘報告書』1987、忠南大学校博物館・忠清南道庁、より再掲）

る高取川右岸の平坦地にある。150mほど北には欽明天皇陵があり、この南側くびれ部付近にはかつて4体の「猿石」と呼ばれる石造物があった。「猿石」を庭園の付属物と考える説もあり、「猿石」の存在はこの遺跡の性格を考える上で示唆的である。遺構は東西に直線的にのびる石積護岸とその前面の敷石、および護岸上面の敷石である。護岸は南面し、延長12m分検出したが、地中レーダー探査によると100m以上続くという。ほぼ垂直に河原石を高さ1.6mに4段積みするが、下部は径1m前後の大石を用い、上部は径20～50cmの石を2段に積んでいる。底石も大きく、径0.5～1mの石を平らに敷き並べ、護岸上面には径20～30cmの石を次第に北が高くなるよう敷いている。遺物から直接、池の年代を確定できなかったが、飛鳥川流域の石材を用いていること、石積、石敷の形態から考えると、飛鳥時代の遺構として問題はない。

雷丘東方遺跡 雷丘東麓で見つかった石積護岸の一部。護岸は高さ2mほどあるが、他の方池とは異なり、垂直に石を積んだものではなく、約25度の斜面に人頭大の石を面をそろえて貼り付けた構造である。幅1m強を確認したにすぎないが、底にも石敷きがあり、方池の可能性はある。

韓国の方池

つぎに韓国の3箇所の方池の概要を記す。

定林寺跡（図16・17） 忠清南道扶余郡扶余邑にあり、錦江左岸丘陵裾の平坦地にあたる。扶余は6～7世紀にかけて百済が最後に都した地であり、定林寺はその中心部に位置する。1983～84年に南門跡の南5.4mのところ



図17 定林寺跡 東池全景（南より）（出典：図16と同じ）

で中央の参道を挟んで東西に並ぶ2基の方池が発掘された。東池は東西15.3m、南北11m、西池は東西11.2m、南北11mであり、深さはともに0.5mほどである。石積護岸は北辺と西辺にはあるが、東と南にはない。池底には敷石はなく、地山のままである。平面形は不明確な部分もあるが、隅はやや丸みをおびる。中央の参道は伽藍中軸線に対して西へ1.5m片寄り、また方位も若干ずれる。池の堆積土からは蓮の葉と茎の炭化物が出土した。池の創建年代は、扶余遷都間もない頃と考えれば、6世紀中頃となる。

扶余王宮跡推定地（図18） 扶余の王都は東から西南方に湾曲して流れる錦江の南側につくられているが、湾曲部の内側に面して王城である扶蘇山城が築かれている。王宮跡はその西南麓に推定されているが、方池はここで発見された。見つかったのは池の東半部で、東西5.3～6.3m、南北6.25m、深さは中央部で1.15mである。護岸は3辺とも雑石をほぼ垂直に4～5段積み上げた石積みで、角は直角に折れる。池底は素掘りで、内部の堆積土からは蓮の葉と茎が出土した。

益山弥勒寺跡（図19） 扶余の南南西33km、全羅北道益山郡金馬面に弥勒寺はある。益山は7世紀に扶余の副都として拓かれた都と考えられている。弥勒寺は塔と金堂の組み合わせが東西に3組並ぶ壮大な伽藍で、方池は伽藍南参道の両側に掘られている。参道は幅50.5mもあり、伽藍中軸線に対して7～8m西に寄っている。東池が東西51m、南北48m、深さ1.2mであり、西池が東西54.5m、南北41m、深さ1.6mと大きい。いずれも基本的に素掘りであるが、東池西岸の一部には4段の石積みがある。池の平面形はきちんとした方形ではなく、池岸も緩やかな斜面をなす。池の造成は弥勒寺の創建期より降り、統



図18 扶余王宮跡推定地 方池全景（西より）（『扶餘官北里百濟遺蹟発掘報告（Ⅰ）』1985、忠南大学校博物館・忠清南道庁、より再掲）

一新羅初期（7世紀末）である。

日韓の方池の比較

日本の方池は、坂田寺跡を除いて他はすべて底に石を敷いている。これに対して、韓国の方池は底に敷石がない。地山面を池底としている。定林寺と王宮跡推定地の池からは蓮の葉や茎が出土していることもあって、韓国では方池はすべて蓮池、つまり蓮を植えて観賞した池と位置づけている。一方、日本の方池からは蓮の出土がない。第一、底に石敷があつては蓮はおろか、他の水生植物も植えにくい。底が石敷ということは水が張られた状態でも底石が上から透けて見えることを意図していたのであろう。水面が蓮の葉などで覆われるのであれば、池底全体に石を敷く必然性が失われる。奈良時代の平城京左京三条二坊宮跡庭園では池底にあらかじめ植枿を据えたり、敷石のない部分がある。平城宮東院庭園でも前期の池では中央部に敷石がなく、後期でも東北部には礫敷がない。敷石や礫敷がない部分には水生植物を植えていた可能性が考えられる。池底に石を敷く、敷かないの区別は、池の使用法や観賞のしかたなど、明確な意図のもとになされていたのであろう。

また、飛鳥では石組の水路や掛樋を用いて導水したと考えられる例が多く、宮跡庭園や東院庭園では本体の池の上流に泥の沈澱池を設けている。韓国の方池はこのような人工的な導水施設や沈澱池がなく、湧水や谷水を水源としたようである。わが国の方池に見られる池底に石を貼ることと清浄で澄んだ水を確保し、池に流し入れることは一貫した技術であり、思想であつたと考えられる。

平面形にも差がある。日本の方池で判明しているものがほぼ正方形であり、比較的正確な幾何学平面を有するのに対して、韓国は東西に長い長方形が多く、平面形もやや崩れている。定林寺や弥勒寺の池では地形的に見て

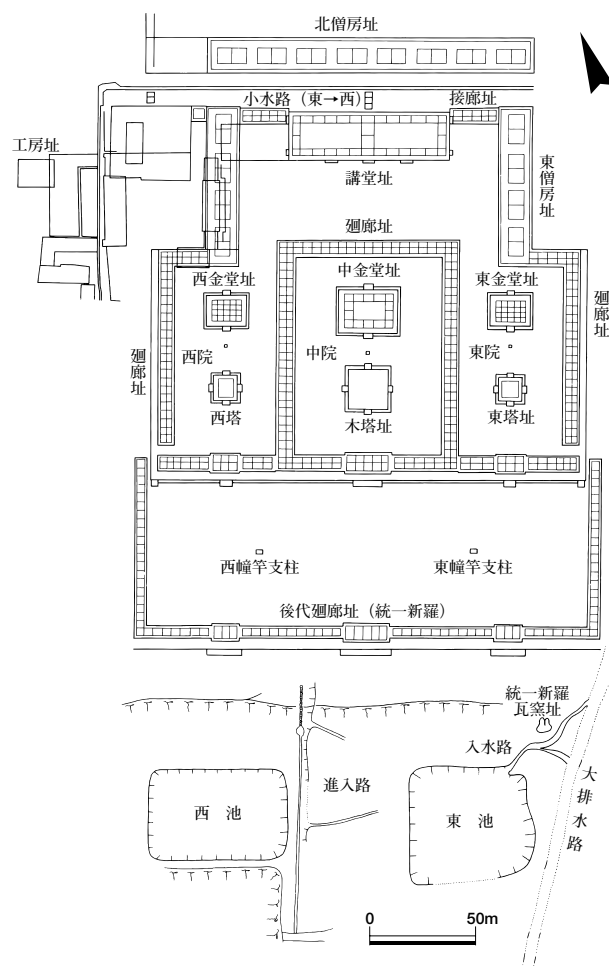


図19 益山弥勒寺跡遺構配置図（『弥勒寺遺蹟発掘調査報告書Ⅱ（図版編）』1996、扶餘文化財研究所、より再掲）

雨水や湧水を処理する機能もあつたようである。

池の護岸はどうか。日本は自然石をほぼ垂直に積み上げた石積みであり、石の大きさも概して大ぶりで、石神遺跡方池Aでは隅に明らかな立石がある。単なる土止め護岸ではなく、美観を意識した石積みといえる。韓国では王宮跡推定地の方池は四辺が石積護岸であつたようであるが、石も小さく、外観を意識した石積みとは言えない。定林寺跡では東西に並ぶ2基の池がいずれも北と西のみに石積護岸があるものの、南と東側には護岸施設がない。弥勒寺跡の2基の池はいずれも素掘りである。

こうした全体的傾向の中にあつて、飛鳥では坂田寺跡の池のみが異端である。底に石貼りがなく、護岸も部分的であり、単なる土止め施設である。百濟との直接的なつながりを感じさせる遺構である。

方池の構造や地形的位置、出土遺物、使われ方などを詳細に検討していくと、日韓の方池には明らかな差異がある。平面形が結果的に類似したのであろうか。系譜が異なることを念頭に置き、さらに広い範囲に視野を拡げ検討を重ねたい。

（高瀬要一）